

ふたたび“て”に関する文字について

——段注「𢇛、持也」を中心に——

大 橋 由 美

1. はじめに

これまで“て”をあらわす手篇以外の主に部首及びそれを初形成分としてもつ下位所属文字（以下、下位字と称ぶ）について、些か論じてきた。¹⁾ 煩を厭わず今一度要旨を繰り返せば、

これらの部首は、その前後と字形が近似であることから十二篇の手部と別置された。十二篇「手」は、身体を外形的に構成する部分である^{パーツ}てと考えられるので、そこに置かれているのである。従って、それ以外の“て”は部分要素でない。形としてのてを様々な角度からながめ、或いはある機能・動作をひきだすために必要な形にしたとき、ての形がその形に変化することに着目して、その変化した“て”が成し得るはたらき（機能・動作・活動状態）である字義を明確にするために各字体（部首及び下位字）が用意されて、その当該部に別置されたのである。

ということであった。

とはいえ、詰る所、同じ“て”であるので、手篇の各字とそれ以外の“て”の各字では関連する点・共通する点が認められる。同義と一見できる例があって、「持」はてのはたらきとしては典型的なものと思われるが、手篇及びそれ以外の“て”部の両系統に見い出せる。三篇下 14a「𢇛、持也」及び十二篇上 26b「持、握也」がそうである。これは一方が親字に付された説解、他方が親字そのものであるが、互訓にかかわる。²⁾ しかし、「類を建て首を一にする」ものではない以上、全く同じであるとは見倣せないはずである。

本小稿では、主に𦏧部の「持」を中心に、この「モツ」について些か論じるものである。

2. “て” をあらわす文字群にみえる「^{モツ}持」について

2.1 「爪」系の「モツ」について

𦏧部は74番目の部首で、前73爪に続くが、15篇上29bでこの理由を、「義同爪、故次之」と字形の系聯によるものというより字義の相関による配列であることを段氏は述べている。³⁾ よって、先ず爪の基本となる字義を考える。

①爪^{3下}_{13b}「㊶𦏧也㊶覆手曰爪㊶象形㊶凡爪之屬皆从爪」

説解 ㊶𦏧である。

㊶覆せた手を爪という。

㊶象形。

㊶凡そ「爪」の属いは全て「爪」を成分としてもつ。

段注 ㊶「𦏧、持也」である（「𦏧」は「持」である）。

㊶仰けにした手を「掌」といい、^{したむ}覆ぎにした手を「爪」という。

㊶側狡切（サウと発音）。二部。

段氏は、15篇下1bで、「部首自体は形の相関により順序だって連なるが、各部首内の文字の配列は意味の相関による」といい、これは「六書の象形に始まり転注によりつづくということである」と述べている。よって、部首爪に「持也」と説かれて、この成分をもつ下位字を次に考えねばならない。

②孚^{3下}_{13b}「㊶𦏧即孚也㊶从爪・子㊶一曰信也」

段注 ㊶……於此可得孚之解矣。⁴⁾ 𦏧因伏而孚，學者因即呼伏爲孚。凡伏𦏧曰抱，房奥反，亦曰𦏧，央富反。

卵は伏（^{8上}_{34a}「司也」段注：引伸之爲俯伏、又引伸之爲隱伏、古音在一部、かえっていない）しているので、これに因んで^フ孚であり、^{フク}学ぶ者は因って^{フク}伏と発音し、^フ孚と（いう文字と）する。……凡そ卵が伏れているのは「抱」といい、房奥反（ホウと発音し）、同様に「𦏧」といい、央富反（ウと発音する）。

㊶錯曰「鳥裒恒以爪反覆其𦏧也」。按反覆其𦏧者，恐煦嫗之不均。芳無切。

古音在三部。

徐鍇は（『繫傳』で）「鳥は裒いて恒に「爪」で自分の卵を反覆させる」という。私がかんがえるに、自分の卵を反覆^{かえ}すとは、均等にあたたまらないことを心配してのことである。芳無切（フと発音）。古音は三部にある。

③爲^{3下}_{13b}「㊦母猴也㊦其爲禽好爪㊦下腹爲母猴形㊦王育曰、爪、象形也」

段注 ㊦……假借爲作爲之字。凡有所變化曰爲。

㊦内部曰^{14下}_{17a}禽者、「走獸摠名」。好爪、故其字從爪……

うまく爪する（覆せた手でモツ）ので、それでその（母猴の類の）字は「爪」を成分としてもつのである。

㊦「腹」當作「復」。上既從「爪」矣。其下又全象母猴頭目身足之形也。

字の上部はすでに「爪」を成分としてもつのである。その下部はさらに母猴の頭・目・からだ・足の全てそろった形を象るのである。

㊦「爪」衍文。王說全字象母猴形也。遼支切。古音在十七部。

④爪^{3下}_{14a}「㊦亦𠂔也㊦从反爪㊦闕」

段注 ㊦「亦」者、亦上篆、此亦「持也」。

㊦對覆手言。

㊦謂闕其音也。其義・其形皆可知、而其讀不傳、故曰「闕」。

㊦「亦」とは、前篆と同様で、ここでもまた（説解＝字義は）「持也」ということである。

㊦「覆手」と対になるといういみである。⁵⁾

㊦その発音を「闕く」ということである。（上述の如く）字義・字形はともに知ることができるのだが、読み（発音）が伝わっていないのであるから、それで「闕」というのである。

以上、72「爪」下の3字は、中に何かもてる形をした下向きの手である「（にぎりしめるものを）モツ」意の成分である部首に、他の一つの成分を付加してでき上ったものである。

②孚（会意）：ふせたてでもつ＋たまご＝かくれてかえっていない卵（をモツ）

③爲（合体象形）：ふせたてとサル（サル）の形→サル（だが、その特徴は“て”にあり、禽獣を巧みにモツことができる。）

④爪（象形）：ふせたてを反転した形でモツ

の各意を表わす。⁶⁾そして、これらの「モツ」は、基本義の「ふせたて」であって行いうる諸動作であると考えすることは、確かに可能である。

2.2 「𠂔」部とその下位字

⑤𠂔^{3下}_{14a}「𠂔持也𠂔象手有所品據⁷⁾也𠂔凡𠂔之屬皆从𠂔、讀若戟」

説解 𠂔「持」である。

𠂔手に何かよりどころとして占める(しめてモツ)ものがあるかたちに象る。

𠂔凡そ「𠂔」の属いはすべて「𠂔」を成分としてもつ。「戟」のように発音する。

段注 𠂔「持、握也」（「持」は「握」である。）

𠂔外がわが拳をにぎる形に象る。

𠂔几劇切。私がかんがえるに、毛詩（『詩経』秦風・無衣）では、戟は澤と韵をなしている。（よって）𠂔は、古音では当然五部にあるべきである。⁸⁾

こぶしをにぎるような形にして、その手のひらの内側（たなごころ）に、その手の中という場所を占めるような何かをにぎって、（その形で）「モツ」というのが、𠂔の基本字義である。

次に、「𠂔」部の下位字をみる。

⑥^{3下}_{14b}𠂔「𠂔種也𠂔从𠂔壺𠂔𠂔持種之𠂔詩曰我執黍稷」

段注 𠂔……樹・種義同。

樹・種は、字義は同じである。

𠂔會意。土部曰壺^{13下}_{20a}「土塊壺壺也」

會意である。土部で壺は「土塊壺壺」とある。

𠂔説從𠂔之意。魚祭切。十五部。……儒者之於禮・樂・射・御・書・數猶農者之樹執也。

「𠂔」を成分としてもつ意を説く。魚祭切（ゲイと発音する）15部。……儒

者にとっての所謂六藝は、ちょうど農業にたずさわる人にとっての樹^{うえる}執^しという
ようなことである。

⑦³_{14b} 𩇛 「㊦食飪也㊦从𩇛𩇛㊦易曰孰飪」

段注 ㊦飪⁹「大孰也（大いに成熟している）」である。食べるべき物が大いに煮
えて成熟していれば、その時は^{モツ}𩇛持てそれを食べるのである。

㊦𩇛部曰⁵_{29a}「𩇛、孰也」。此會意。

ここでは會意（成熟しているものを^{モツ}𩇛する）である。

⑧³_{14b} 𩇛 「㊦設飪也¹⁰ ㊦从𩇛食、才聲。讀若載」

説解 ㊦熟成した（煮えた）食べ物を貴人・神のために備えおく。

㊦「𩇛」と「食」とを成分としてもち（＝「食」を^{モツ}「𩇛」）、^{サイ}「才」（作代
切、1部）がその発音。^{サイ}「載」（作代切、1部）のように発音する。

⑨³_{14b} 𩇛 「㊦裒也㊦从𩇛工聲」

段注 ㊦手部¹²_{25b}「𩇛¹¹、攤也」、¹²_{41a}「攤¹²、裒也」。

㊦手をまわしふところにいまく（^{モツ}）。

㊦「𩇛」を成分とし、^{コウ}「工」がその発音。

重文 ⑨' 𩇛 「㊦𩇛或加手」

段注 ㊦又見「手」部¹¹

⑩³_{15a} 𩇛 「㊦相踦𩇛也㊦从𩇛谷聲」

段注 ㊦「踦」當作「𩇛」（¹²_{45b}「偏引也」）。『玉篇（72 𩇛）』作「𩇛」。¹³

㊦対象の片方をひき、またはかたよってひき、ほどよくしりぞける（後述
参照）。

㊦「𩇛」を成分とし、^{コウ}「谷」がその発音。

⑪³_{15a} 𩇛 「㊦擊𩇛也。从𩇛戈㊦讀若𩇛」

段注 ㊦疑奪聲字¹⁴

㊦胡瓦切。古音在十七部。

⑫³_{15a} 𩇛 「㊦亦持也。从反𩇛㊦闕」

説解 ㊦同様に^{モツ}「持」である。反転した「𩇛」を成分とする。

㊦闕。

段注 ㊦ここでは（左・右の字と）同様に、手のみぎ・ひだりの別であるといういみである。

㊦（これも前出爪と）同様に音読^{はつおん}が伝わらないといういみである。¹⁵⁾

以上𠂔部の7例の説解による六書と字義をまとめると、

⑥𠂔（会意）：𠂔＋土のかたまり＝（掘った）土くれをモッて（とりのぞき、そこに）植物の苗をうえる。

⑦𠂔（会意）：𠂔＋たべごろのたべもの＝煮えた或いは成熟したたべものを、（モッて）たべる。

⑧𠂔（形声）：（𠂔＋たべもの）＋音才→たべものを（モッて）貴人のために用意する。

⑨𠂔（形声）：𠂔＋音工→つつみいだく。

（但、更に「手」を付した別篆あり）

⑩𠂔（形声）：𠂔＋音谷→対象を一方にかたよってひき制御して（これにより対象を）しりぞける。

⑪𠂔（形声）：𠂔＋音戈→かかとを撃つ

⑫𠂔（象形）：部首𠂔と対になる（左手で）モツ

となる。「𠂔」系はモツものを明示しているようで、その点、同義の2.1の「爪」系の如く下向きの手である必要は確かにない。

ここで、説解にひく用例に注目して、今一度上記の字義を考える。

そもそも、清朝漢学の学風にあつては、真の説を裏付けるために適切かつ必要な証拠を十分用意し、その支持する論を展開する。「实事求是」である。¹⁶⁾これは同時に、無駄で余計なことはいわぬ、むしろいうに及ばないということ、時にかえって読み手の理解の度をためされ知識を要求される態度である。段玉裁もこの基本的態度を段注を著わす場合に勿論貫いた。引証用の資料の採用がまずその端的な現れである。経書・群經に適切なものが見出せぬ場合には、段氏は特に当時行われていた自らが知る方言さえも積極的に用いるという

実証を重視する独得の研究態度を実践した。¹⁷⁾ 従って、挙げられた根拠は限られたものであっても厳選されたものに相違なく、それ故、字義の系聯と考え合せた場合には相互に有意義なものと考えねばならない。

上記 7 例では、説解で⑥𧰨は『詩経』小雅・楚茨、⑦𧰨は『易』鼎卦をひく。段注は、⑤𧰨は発音を裏付けるために『詩経』秦風・無衣、⑥説解を支持し、『詩経』齊風・南山で補強し、⑦も同様に『易』を支持し、⑧𧰨は『廣雅(釈言)』、⑨𧰨は『説文』自身を用いる。

これらを傍証としたモツは、一見して庶民のありふれた日常的行動のそれではないように感じられる。

なぜなら、『詩経』小雅・楚茨は、周代の理想の天子が統べる御代の農事を歌うが、それは、穀祭を意味し、豊年を祝うものであるからである。西岡弘氏「籍田考」¹⁸⁾によれば、「天子親耕の儀礼は古来よりの礼」P. 330 であり、⑥𧰨はまさにその天子の行為と考えられる。すると、段氏の引く齊風・南山は、旧序¹⁹⁾によれば、淫行をはたらく君主である襄公を刺ったものであるが、善政の例として⑥𧰨(𧰨)が用いられていると一歩進んで考えられるのではないだろうか。また⑦𧰨『易』「鼎」は、これは飪を烹る祭器で、この卦は天子の政の革新をいう。これらの用例が初出で本義であるから、基本は公に行う何か特別なモツであることは疑を容れない。

また、⑦・⑧以外は説解に経書を引かないのであるが、上述のことから、段氏引例の根拠について重ねて考えなければならないと思われる。

⑩𧰨では表面上『玉篇』以外の用法の証の明示はないが、「𧰨」を「𧰨」に改めている。

²_{24b}𧰨「㊦一足也㊦从足奇聲」

段注 ㊦『戦國策(趙策四)』「必有𧰨重者矣」(注)「𧰨重、偏重也」……則皆謂足、不必一足也。

㊦去奇切。古音在十七部。

¹²_{45b}𧰨「㊦偏引也㊦从手奇聲」

段注 ㊦一本作「偏一足也。」(『後漢書』司馬相如傳『索隱』引『説文』)……此

依『左傳』(襄公14年)注増一字耳。

⊖居綺切。古音在十七部。

「一足(片足)」を必ずしもそうでなければならぬという証がないとした理由(証)を挙げ、「偏引(かたよってひく)」と改め、「卻」は「てでモッてそのようにひき、(相手の力を)制御して、しりぞける」と解する。

ところで、桂馥『義證』では、「相踦𢓂也」とし、「踦」は「一足」と解するが、「𢓂」は『史記』司馬相如傳・上林賦「徼𢓂受屈」の『索引』「倦也」・『集解』「疲極」をひき、「謂踦𢓂者、足倦相倚(あしがつかれて、何かによりかかる)」という。王筠『句讀』でも、「相踦𢓂也」とし、桂馥同条説の「踦𢓂者、足倦相倚也」をひき支持する。しかし、朱駿聲『定聲』は、「相倚𢓂也」と段説に同じく、上記『史記』の二注をひく。朱氏は、「(モッて)相手の足を一方からひき、その力をおさえて屈させ、これを獲える(モツ)」と理解していると考えられる。

このことは、とりもなおさず、小徐『繫傳』の「謂以力相踦角徼要極而受屈也(力で鹿の足を一方からひき、角をとらえてかこいの中にかこいこみ、つかれさせ(てとらえ)る)」に同じである。そして、小徐を(暗黙のうちに)支持する傾向がある段玉裁としては¹⁶⁾、やはりここも明言はしないが、朱氏説に同じく𢓂を「おさえしりぞける＝とらえる」とみなしたといえよう。これは、鹿(古くは犠牲)の狩猟法であろうか。(後述参照)

こうしてみると、「攻撃対象のあしの力をよわらせ(殺さずコントロールして＝撃うつ)、獲える」という点で、次の篆文「𢓂、撃蹠也(あしのくるぶし又はかかとを撃つ)」と系聯する点が明確になったように思われる。この根底に「モツ」という一連の動作があるといえまいか。ウツが重要である故に、モツの如何に拘らず説解で「撃蹠也」とされたのである。

このことは、厶で終る「𢓂」部の次が74 鬥部であることと考え合せれば、一層明らかとなるように思われる。

⑬³_{15a} 鬥「⊖𢓂士相對、兵杖在後。象鬥之形⊖凡鬥之屬皆從鬥」

段注 ⊖按此非許語也。許之分部次第、自云「據形系聯」。「𢓂」・「厶」在前部、

故受之以𢇛、然則當云「爭也」。兩「𢇛」相對象形、謂兩人手持相對也。乃云「兩士相對、兵杖在後」。(・は大橋付加)

○許慎の部首(分類)についての次弟の原則は、自序でいうように「形に拠って系聯する」である。(よって、前の部については)(初めに)「𢇛(みぎて)」「(おしまいに)」「𢇛(ひだりて)」が当「鬥」部の前にあるのであるから、このことの故に、部を受けるのに、「𢇛」でなされているのである。そうであるからつまり、当然「爭也(あらそう)」と説解はすべきである。二つの「𢇛」が相對する象形で、(これは)二人は手が優劣なくはりあいもちこたえたままむきあうといういみである。そういうことで「二人のおとこ(戦士)が、むきあい、武器は後においてある(素手でたたかう→必ずしも命を奪うことが目的でない)」というのである。

これにより、前篆𢇛は「撃つ」であるが、鬥(素手でたたかう)に近く、「てでうつ」とすべきではないかと考えるのである。²⁰⁾

また、⑧𢇛も『玉篇』・『廣雅』のみをひくが、前引西岡氏同論考では、「食物をそなえる」に関し、「なお、籍田礼のあとの饗宴を月令で勞酒というが、本来はあらかじめ豊年を祝し、上帝の加護を頌ぐ饗宴であって」と赤塚忠博士「殷王朝における上帝祭礼の復原」(『中国古代の宗教と文化』所収 研文社、1990、1復刻版参照)をひいて述べておられる(p. 335)。さらに、「為政者としては、国の大事たる農のために齋戒して立春を迎え、祈穀・籍田の重要儀礼を行い、祭祀の衆盛に供して報本反始の孝道を示すと共に、自らの天子としての威霊を高めるために、吉夢の献・悪夢の贈・難・招弭と続くたまふりの儀礼があったと考えられる」(p. 339)と述べておられることは、前篆「𢇛」・後篆「𢇛」(つまり天子の祭祀用の狩猟法か)の配列の意義を思えば、大変興味深く、重要な指摘と考える。

ところで、大橋 1998 でも述べたが、『金文篇』(1969、東海書店版 容庚『金文篇』初版に同じ)の手篇の字は『説文』所収 264 字に比して非常に少ないが、それ以外の“て”をあらわす部首及び下位字は割合としては多いという事実がある。

三篇「𠩺」部は、𠩺・𠩺・𠩺・𠩺・𠩺・𠩺の6字を取め、わずか𠩺を欠くのみである。このことは、古くは、これらの文字が一般に用いられ、祭器である金文に記すほどであったことを意味するとまづいえる。

これら6字の「𠩺」成分が手にもつものは、𠩺では、𠩺（くさの初生）・𠩺（土付の植物）・𠩺では工、𠩺では戈であるが、もっている当人はひざまづく形をしている。𠩺では女性が添加されており、𠩺では犬にとってかわられているものもある。

また、金文中に於ける用例をみると、𠩺は毛公鼎に於て「𠩺小大楚賦……」とあり、𠩺は卯簋に於て、「𠩺乃光且考死司」・沈子簋「用𠩺饗己公」とあり、祖先を祭る（饗応する）儀礼にかかわる行為と思われる。𠩺も毛公鼎で「丕𠩺先生配命」又「永𠩺先王」と用いられ、同様に祖先を祭る折の行為と思われる。

また、𠩺については、『金文篇』では数例みえる。例えば𠩺簋では人名であるが、作器の故を記し、もって祖先を祭ることをいう。²¹⁾

因みに、このことにつき白川静氏は『説文新義』（白鶴美術館 昭和49.7）では次の如くのべる。（巻三 pp. 561～563. 今要点のみまとめる。）

𠩺：蹲居して両手を以て物を奉ずる象。𠩺・木・王・戈などを奉揚する形がある。金文には……朕の意に用い……

𠩺：ト文の字は祭名につづけていう例が多く、祭儀に関する字である。……金文の字は種藝の象とはみえず、むしろ……官執のことと関係があろう……

𠩺：字は食に従うものであるから設食を伴う儀礼であるが、ト文では祭名にして五祀の一。

𠩺：字は工を執る象。工は巫祝の用いるところで、祝儀に関する字とすべく……

𠩺：金文にこの字が数見し、……人名……祭儀をいい……武臣……兵器の名であるらしい。撃蹠と訓すべき文例をみないが、者𠩺臣（麥尊）とはそういう武技をもつものかもしれない。……

実際の行為とそれを文字として器に刻した時代、及び『説文』が説解で字義を説いた時代との“時の隔り”を考慮すれば、具体的には未だ明らかではないことが多すぎるように思われる。しかし、敢えて、「𠩺」系が『金文篇』中に

わずか1字のみを欠くにすぎず、見られる例がいずれも祭礼にかかわるものであることを重んじ、これまでのことから最小限明らかであることをとり出せば、「𢶏、持也」はありふれた日常的行為としてのモツではないとやはり言えるのではなかろうか。『説文』の文字の配列及び引証例にみる如く、特殊な条件下での行為であり、それ故に多様性に富んだ行為としてのモツである可能性を覚えるものである。「𢶏」とは、「持、握也」を基本に、「つかまえる・いただく・おさえ力をそぐ」、更に、「互いに優劣なくもちこたえる」とまで展開する全てのものを一語中に含むものである。

2.3 「𢶏」系のモツ

「𢶏」のモツは、上述の原義に、この部首に他の要素を付加して下位字の会意・形声と孳生し或いは反転形の象形を生じ、拳を「にぎる」基本義から発展して、モツの諸相を表わすようになった。

下位の各字は、うえる（農耕）・食べる・ころあいのみのりを召し上っていただくべく用意する・いだきつつむ・禽獣をよわらせる（狩猟）・すででつかまえうつ（戦さ）で、まさに心情的には、人としてモチこたえたい人間世界を表わすとはいいすぎか。

最後に、12篇上26b「持、握也」というモツと別置された「𢶏」モツを成分とする文字は、下位字の数が多いという点で発展・活用の程度ははなはだしくはないが、その字義が上述のように特殊で広範な意味を含む文字であることは、注目に値するものであることを付け加えておく。これは、十二篇「持」そのものがある動詞の下接として用いられて一つの字義・ある別の一文字を表わすことがしばしばあることを考え合せば、より明確である。（これは、「V持也」型としてある。）²²⁾ すなわち、手部モツは一義限定を、𢶏部モツはむしろ字義拡大を任うという点が、同義ながら部首を異して置かれた故ではないかと考えるのである。

3. おわりに

「持」は、今日「もつ」と訓む。

『日本国語大辞典』（昭和50年5月第1版 小学館）によれば、「もつ」（第19巻、p. 305、2段のみ）とは、古くは『万葉集』巻一「籠もよ み籠母乳 掘串もよ み掘串持」と初出し、「自分の中に入れて保っている・手に取る・所持する（もっている・携帯する）」（・は大橋付加）意で用いられているという。

これは初動作としては、とる動作であるが、その動作そのものを行うことを主眼とするものではなく、とる動作の結果である状態及びその持続にかなり重点があることをいう用法であると古人は理解したという注である。また、同書には、「もち〜」と連用形に他の動詞を下接させ、多くの日本語として発展した例が「もちあつかう」p. 295 から「もちわける」p. 305 まで記されている。他の動詞を上接させたものも別にかなり認められる。

一方、「とる」（同書15巻 pp. 86～87）の項をみると、用字上は「取る・執る・採る・捕る」であり、同書は、原来「手（て）」の動詞化したものであるとまず記すが、このことは大いに注目すべきことではないだろうか。字義の実際は多項目に亘るので、今主要なもののみを列挙するに止める。

（一）①にぎってもつ。身からはなれないようにしっかりもつ（『日本書紀』の用例）

②手にもって何かをつかう。

③手にもったり、つまんだり、さしたり、引いたり、上げたりする。例：苗をうえる（『古今集』172「昨日こそさなへとりしか……」）

④にげないようにしっかり押える。つかまえる。捕獲する。例：『記』下（歌謠）「鷓鴣登良さね」

（二）自分のものになるように、また自分の物として持てるようにする。農作物・草木・魚介類などを収穫・保存する。例は『紀』（応神紀）と古いものがある。

（三）それまであったところから、引き離す。

③生命を奪う・うちとる・また、首を斬り放す。例：『万葉集』972「言拳

げせず、取り来ぬべき男と思ふ」

④むりやりに、また、ひそかに他人の物を自分の手に収める。うぼう。

この他に、活用して連用形「とり」を用いて自身が上接するもの、或いは「～とる」型で下接するものもある。「とる」の本義・用法の解説に割かれた紙幅の方が一見して多い。この点は「もつ」と対照的であるといえる。

そして、些か牽強附会に過ぎるかもしれぬが、例えば、⑥𢦏は(一)③、⑦𢦏と⑧𢦏は(二)?、⑨𢦏は(一)①、(三)③「生命をうぼう」まで至るのか否かは不明だが、⑩𢦏と⑪𢦏は力をそいだりダメージを与えたりすることは明らかであって、すなわち、以上のように「とる」の解説と重なる点があるように思われる。「𢦏」自体については、正に「もつ」より「とる」の(一)①にあてはまるものであると勿論いえるのではなからうか。

つまり、意外にも、国語「とる」の訓が、「𢦏」を表わすためには、かなり有効であるように思われるのである。

荻生徂徠は『譯文筌蹄』に於て、「持」を「トル」と訓じている。²³⁾

古来より外国語である中国語をどのような日本語として理解してきたかということは考慮すべきことであり、その意味で、この訓みは資するに足る示唆に富むものであると考える。

注

- 1) 拙稿「“て”をあらわす文字について——段注にみえる又・爪・𢦏・𢦏を中心に——」東京都立大学『人文学報』292号1998.3
- 2) これは段説では、所謂転注にかかわる。十五篇上5b「○五曰轉注。○轉注者建類一首。同意相受。考・老是也」：段注○轉注猶言互訓也。……數字同義、則用此字可、用彼字可。……○同意相受、謂無慮諸字意旨略同、義可互受相灌注而歸於一首。……但、類見於同部者易知、分見於異部者易忽。
- 3) 73爪は72𢦏に続くものであるが、同15篇上29bでは、爪は67𢦏を蒙けたのであるという。筆者は、「全書を通じては1～2割程度」ではあろうが、第三篇全体の部首の並びにおける字義による系聯は大きいと考えている。
- 4) この前段で、『通俗文』『方言』『廣韻』の卵がかえる＝孵化する(変化する)

というのを採らず、「未化」であると説く後述を採った。(8篇上34b伏字下の段注にある隠・俯(かくれる・うつぶせる)を支持)

- 5) ふせた手を反転させるので、上向きの手。㊦下に、すなわち「掌」(「爪」下段注「仰手曰掌」参照)であり、「𠂔持之訓」と正合すると付け加えてのべる。
- 6) 前述¹⁵_下で、「文字は象形に始まる」という段氏説は大前提である。ここに象形があるのは部末だからであって、部末とは「雜之部」というべきで、また先首のものと対になる字体がしばしば置かれる。
- 7) 12篇上27b 據「㊦杖持也㊦从手𠂔聲」㊦謂倚杖而持也……(杖=よりどころに倚って^{モツ}持すという意味である)とある。
- 8) 「秦風・無衣」：豈曰無衣，與子同澤，王于興師，脩我矛戟，與子偕作。また、『六書音均表』四で、戟は第五部「古本音」とする。澤¹¹_上 文伯切。古音在五部。
- 9) ⁵_下 飪「大孰也」段注：字又作飪、飪同飪。
- 10) この段注では「飪、宋本作食」というが、大・小徐共に今は「飪」に作る。よって『考正』では、このことは「蓋誤」という。そして、『玉篇』(72 𠂔部)は、「設食」に作り、『廣雅(疏證)』は、「飢」を改め「飪、設也」とする。段注のいう如く、「𠂔」の字義の連関からすれば、錢大昕説「飢」は退けるべきである。段注の証は他には見い出せないなので、今はこのまま従い解釈する。本稿後述参照。
- 11) 同条段注は「按此篆已見「𠂔」部、爲𠂔之或字、此不當重出。當是淺人所增、刪之可也。𠂔訓擁則當與篆相聯爲文、增之者廁非其所。」前後の字義の関連を考慮せず、しかるべきところでないところにおいてしまったという。
(・は大橋付加)
- 12) 段注は「『玉篇』作𠂔、蓋古體也。抱之則物必前、故上離下手」とある。
- 13) ⁹_上 卻「𠂔欲也」段注：今依『玉篇』「欲」爲「卻」……「𠂔卻」者、節制而卻退之也。
- 14) ²_下 𠂔は胡瓦切、17部で、¹²_下 戈は古禾切、17部。だが、「𠂔」と「戈(武器)」の「武器をモツ」意の会意字とすると説解に合わない。従って、字義によって六書を改めた方がよりふさわしいという意味で「疑」としたと思

- われる。(実際には改訂しない。) 今、形声として解釈すると、説解は「蹶を撃つである。「𠂔」を成分とし、「戈」がその発音」となる。
- 15) このあと続けて、「[从反𠂔]であれば、音は居玉切で、その発音であれば𠂔₁₂に近く、字義も「搨、戟持也」とあるという。しかし、「この𠂔と搨は同音であるとは『説文』ではいっていないので、この場合は結局「蓋闕」とするのが適当」と述べている。𠂔字同様やはり説解は訂正しない。
- 16) 頼惟勤『説文入門』(大修館書店 1983. 6)『中國古典を読むために』(大修館書店 1996. 3) 参照。また広く清朝の學風については、『清朝考證学の研究』(近藤光男 1989 研文出版) に詳しい。
- 17) 拙稿 1987『『説文解字』研究一段注に散見する段玉裁当時の方言・方俗・事物・事象に関する記載についての一考察—資料篇Ⅰ江蘇一帯』『中国語学』234、1988a.『『説文解字』研究一段注に散見する江蘇記載部分についての一考察』『都立大学人文学報』198、1998b.『『説文解字注』に散見する俗語・資料篇Ⅱ』『お茶の水女子大学中国文学会報』7 参照。
- 18) 『中国古典の民俗と文学』(角川書店 昭和 62.2) 所収。
- 19) 今日では必ずしも当を得たものであるかどうかうたがわしい。目加田誠氏『詩経』では、「その時当の民が或いは噂し、或いは諷刺した事柄があったので」旧序は故事を記し、また、「王に訴え、上に立つ人の心を訛して、正しき道に向せようとしたものである」という。(講談社 1991)
- 20) ₁₂^上₂₆「撃、支也」とある。
- 21) 松丸道雄氏『甲骨文・金文』(中国法書選Ⅰ 二玄社 1990.11 初版)・同『ガイド』参照。特に No. 21・24.『金文篇』及び後述白川氏にいう𠂔₁₂は、二祀のもので、𠂔₁₂は𠂔₁₂殷である。𠂔₁₂其𠂔₁₂(𠂔₁₂𠂔₁₂)は紀年の異なる器が三種あるが、銘文・器ともに真器であるのは六祀のみ。
- 22) ₁₂^上₂₆「持」については稿を改める予定である。
- 23) 小泉秀之助校訂。須原屋書店(明治四十年十二月初版) 発兌。(活字本)